

「いのち」の教育実践事例

☆山形市の実践

(山形二小、大曽根小、山寺小中)

生命の継承の
大切さに
関する教育

— 「いのち」「助け合い」の大切さを学ぶ学習を通して—

山形市内の各学校では、「いのち」や「助け合うこと」の大切さを学ぶ学習等が組織的・計画的に行われています。その中で、子どもたちの成長に効果的だった取組を紹介します。

○ 山形市立第二小学校の実践

「SOSの出し方教育」受講

- ・県立保健医療大学安保寛明教授を招き、SOSの出し方について学んだ。
- ・脳にストレスを抱えた時、ゲームを楽しむ行為は気晴らしにしかならず、脳を休めることにはならない。心の状態を紙風船に例え、つぶれた紙風船を戻すには周囲の力を借りるしかなく、だから身近な人に助けを求めてよいことを学んだ。
- ・日頃から自分の良いところや楽しかった思い出などをリストアップしておき、ストレスを感じた時には自分で自分を元気づけると良いなど、日常的にできる対処法を学んだ。

○ 山形市立大曽根小学校の実践

- ・毎月1日を「いのちの日」に、6月1日から10日までを「いのちの旬間」に設定し、全学年で「生命の尊さ」「親切、思いやり」を重点にして道徳の授業を実践している。
- ・第1学年「みんなあかちゃんだったよ」の授業では、実物大の赤ちゃんの模型を抱っこしたり、自分が小さかった頃のことを思い出したりしながら成長の足跡を振り返った。できるようになったことの多さに気付くとともに、驚いたことや「いのちってすごいな」と思ったことを伝え合うことができた。

○ 山形市立山寺小中学校の実践

- ・今年度は、学校・家庭・地域が一体となって自分たちが生活する地域を知り、自分のいのちは自分で守る意識と助け合いを大切にす共助の意識を学ぶ「いのちの教育」の実践ができた。
- ・全校生（小3 2名、中2 4名）が、地域の危険箇所を理解し、自分たちに何ができるかを考える良い機会となった。
- ・自然の脅威を体感する模擬体験が災害を身近に感じるきっかけとなった。
- ・地域全体で助け合うことの大切さに触れることができた実践となった。

つらいときには、身近な人に助けを求めてもいいんだね。



いのちってすごいな。
あかちゃんなのに、たべられるようになったんだ。



山寺と同じだね。

想像以上に重くて大変だね。

